書評

石井正己著『柳田国男と遠野物語』
石井正己監修、青木俊明・表賢司・菅沼秀行・多比羅拓編『遠野物語辞典』
石井正己編著『昔話の伝承と資料に関する総合的研究』

川森　博司

石井正己は、遠野という場所にこだわりながら、『遠野物語』の研究を進めてきた。『柳田国男と遠野物語』は、明治四三年（一九一〇）に出版された『遠野物語』初版本の成立過程を追究した『遠野物語の誕生』（若草書房、二〇〇〇年）を引き継ぐ書物であり、自ら『続・遠野物語の誕生』として位置づけることができると述べている（三二三頁）。『遠野物語の誕生』が「聞き書きの開始から刊行直後までの二年間」に限定して、掘り下げを進めていたのに対し、本書では、昭和一〇年（一九三五）の『遠野物語　増補版』の成立過程にまで視野を広げ、柳田国男と遠野物語の関係にとどまらず、折口信夫と遠野物語の関係、折口信夫と佐々木喜善の関係がクローズアップされている。前著にも増して、日本民俗学の成立過程に踏み込んだ研究になっている。

石井の方法の特徴は、テクストとしての『遠野物語』に徹底してこだわるところにある。「書誌学」的方法といってよいが、それを遠野という場所に自らも身を置きながら実践している点に独自性がある。本書に収録された一〇本の論考のうち六本が遠野における講演をもとにしたものであり、語り口調の「です・ます体」で全体が統一されている。遠野で遠野の人々に語りかけることから、自らの学問を立ち上げていこうという石井の強い意志がここに反映されているように思われる。

まず、第一章にあたる「遠野と『遠野物語』」では、釜石線の全線開通を目前にした昭和二四年（一九四九）に当時の遠野町で発行された『遠野』という本に柳田が書いた「序」を手がかりにして、論を始めている。柳田が昭和四年（一九二九）に飛行機に乗って、空から遠野を見た印象を記していることから、石井は「飛行機と鉄道とが柳田の中で結び付き、新しい交通手段が、日本の中に次々と入り込んできた時代の変化というものを深く考えていたのでしょう」（三頁）という解釈を示している。そして、『遠野物語　増補版』に収録された「遠野物語拾遺」に、昭和二年（一九二七）にこの地方の空を初めて飛行機が飛んだという話が収録されていることへと話を進め、「「遠野物語拾遺」には、一方で飛行機で飛んだ話があり、また一方では天狗が飛行したという話が載っているのです。「遠野物語拾遺」の世界は、そういう新しさと古さを抱え込んでいたのだということになります」（一一頁）と述べている。そして、そのあとで、『遠野物語』の聞き書きの過程と柳田の遠野旅行における喜善の協力へと話を進め、「民俗学という文脈から一旦切り離してみることによって、『遠野物語』の可能性は大きく開けるはずです」（一九頁）と主張している。ここに石井の本書を貫く主張が現れているといってよいであろう。

続いて、佐々木喜善の昔話集刊行への歩みと、喜善の死後、発行されることになる『遠野物語　増補版』との交錯する関係を述べ、また、それと重なる時期である昭和八年（一九三三）に遠野で朗読会をおこなうために謄写版の『遠野物語』が作られていたことへと話を進める。この地元での朗読会について、石井は「おそらくこの時期、柳田が懸念した『遠野物語』のタブーから徐々に解き放たれ、「名著」に転換しつつあったのでしょう」（二九頁）という見解を述べている。この謄写版の『遠野物語』についての考察は、本書の主題のひとつである遠野における『遠野物語』受容史において、鍵になる位置を占めている。そして、そのあとに「民話」と「語り部」の発見という石井の前著『遠野の民話と語り部』（三弥井書店、二〇〇二年）の主題となった部分に説き及んで章を閉じている。

石井は「本書を折口信夫論でもあると考えている」（三三四頁）と述べている。したがって、この書評も、折口が関わった『遠野物語　増補版』の成立過程の解明が口承文芸研究にとってどのような意味をもつのかという視点から、論述していくことにしたい。

四番目の章に当たる「『遠野物語』の絵図分析」においては、『遠野物語　増補版』において初めて「遠野郷本書関係略図」が入ってきたことを指摘し、「我々は文庫本などで『遠野物語』を読むとき、この地図が入っているので、あたかも初版本からあったかのように錯覚してしまいますが、それは誤りだとわかります」と述べ、「テキストの違いを無視した『遠野物語』論は、もはや成り立ちがたい」という点を強調している（一一九頁）。

五番目の章「遠野物語朗読会のこと」では、胡桃沢勘内が「アララギ派の短歌から郷土研究へ移っていく契機が、『遠野物語』の美しい文章を何度も読みふけった体験にあったこと」（一三九頁）を指摘し、『遠野物語』が当時音読されたことの状況証拠を積み重ねて、当時における「遠野物語朗読会」の位置づけをおこなっている。そして、「戦後になって、『遠野物語』の振り仮名が削除されたというのは、音読から黙読に移行したことと深く関係しているはずです」（一五五頁）との見解を述べている。

六番目の章「折口信夫と『遠野物語　増補版』」は、本書において重い位置を占めている。石井はそのテクストにこだわる方法によって、『遠野物語　増補版』に付された折口の「後記」を綿密に解読し、『佐々木喜善日記』と二人の間で交わされた書簡の読み込みを合わせて、「喜善が死んだことについて、その意味を深く考えようとしていたのは、誰より折口だった」（一六四頁）という仮説を立証しようとする。「遠野物語拾遺」の原稿の整理について、折口は「後記」において「一等骨惜しみをしない鈴木脩一さんに、編輯為事を引きうけて貰つた次第である」と述べているが、石井はそこから「鈴木に仕事をさせたのは、柳田ではなく、折口だということになります。興味を失っていた柳田は動かなかったけれども、志しを起こした折口が鈴木に仕事をしてもらった、という言いぶりです。やはり、陰で出版の後押しをしたのは折口ではなかったかと思います」（一八七－一八八頁）と推測している。『遠野物語　増補版』は、柳田の還暦を記念して開催された第一回日本民俗学講習会で披露されたのであるが、石井は「柳田に対する祝福を前面に出しながらも、同時に、喜善に対する鎮魂を実現した」（一九七頁）というように解釈している。

七番目の章「『遠野物語　増補版』発刊まで」においては、『遠野物語』の「続篇」の刊行が進まなかった点に触れて、「『遠野物語

の「続篇」が頓挫したのとさしかえに、佐々木には、研究者として自立してゆく道が開けた」（二〇三頁）と位置づけている。喜善は、『遠野物語』の「続篇」として書いてきたものを『人類学雑誌』や『郷土研究』に「遠野雑記」「ザシキワラシ」「オシラサマとオクナイサマ」「奥州の瘤取童話」というような形で発表していったのである。そして、「『遠野物語　増補版』が刊行された理由は、まさに柳田が「再版覚書」で述べたように「是に追加するつもりで、折角故人の集めて置いた資料が、散逸してしまうかも知れぬ懸念がある」という、その一点にありました。はっきりした言い方をすれば、佐々木が生き続けていたら、この本は出されないままに終わった可能性が高いということになります」（二二〇頁）と結論づけている。

八番目の「『聴耳草紙』と「遠野物語拾遺」」は、昭和六年（一九三一）に刊行された『聴耳草紙』と昭和一〇年（一九三五）に刊行された「遠野物語拾遺」（『遠野物語　増補版』に収録）を比較検討するなかで、書き手としての佐々木喜善にさらに焦点を当てた重要な章であり、口承文芸研究に大きな示唆を与えている（『聴耳草紙』の刊行と『遠野物語　増補版』の刊行の間の昭和八年（一九三三）に佐々木喜善は四八歳で逝去している）。まず石井が重視するのが『聴耳草紙』に柳田が寄せた「序」である。柳田が、昔話の変遷を知るために「佐々木君のやうな飽きずに何時迄も集められる蒐集家が非常に役立つた」というように「蒐集家」を位置づけたのちに、「能ふべくんば、この採集者に若干の余裕を与へて、これほど骨折つて集めて来たものを、先ず自分で味ふやうにさせたい事である」と述べていることに注目し、「「蒐集家」が、将来において、自分の土地の昔話を味わい研究していく」という道筋を柳田が考えていたことに昔話研究の可能性を見出している（二三八－二三九頁）。

また、同じ題材にもとづく話でも『聴耳草紙』と「遠野物語拾遺」では叙述の仕方が違う点に石井は注目している。「場所や地名、神様にこだわりながらまとめていった「遠野物語拾遺」と、主人公から立ち上げて、それを一編の話としてまとめた『聴耳草紙』とは、同じストーリーでも、書き方がずいぶん違うことがわかります」（二五六頁）と石井は述べている。石井はまた、「佐々木は、同じ話でも、『聴耳草紙』に使う話と柳田に送った話とを使い分けようとしたところがある」（二六〇頁）と指摘する。出所は同じでも「『聴耳草紙』は昔話として書いているし、「遠野物語拾遺」は口碑（伝説）として書いている、という違い」があり、「昔話と口碑（伝説）の間を行ったり来たりできるような話が、『聴耳草紙』と「遠野物語拾遺」の両方に入り込んでいった」という解釈を石井は示している（二六三頁）。

このような両者に収録された話の比較研究は、現在に残されている口頭伝承の資料がゆらぎを持ちながら定着していった様相を示している。テクストにこだわる石井の研究の意図は、その作業をとおして、記述された文字の向こうにある口承の世界のざわめきをつかもうとすることにあるように思われる。

九番目の章「『遠野物語』の時間叙述」では、「遠野物語」と「遠野物語拾遺」の時間の叙述の仕方を比較考察している。「「遠野物語」が中央からの年号や事件を時間の叙述から巧みに排除して、独立した時間の流れをもつ社会として（遠野を）位置づけたのに対して、「遠野物語拾遺」は中央からの年号や事件を時間の叙述に取り入れて」いる点に決定的な差異があると石井は述べている（三〇〇頁）。時間叙述の点からも『遠野物語　増補版』は『遠

野物語』初版本とは異なった性格の説話群を抱え込んでいることを、ここで説明している。

本書の価値は、現在に残されている口承文芸の資料が、特定の時代状況のなかで、幾人かの鍵になる人物の相互作用を経て成立していることを示して、「口承文芸研究におけるテクストとは何か」という問いを問い掛けている点にあると思われる。柳田国男の『遠野物語』の存在が虚実を含めて大きくふくらんでいるために、その背後で見えにくくなっている佐々木喜善の昔話集の意義、「遠野物語」本文とは異質な性格を持つ「遠野物語拾遺」の意義をクローズアップすることによって、「口承」の世界に肉迫する道筋を本書は示している。

このように本書から評者は多くのことを学んだのであるが、文化人類学および民俗学の立場から遠野の現在に関わっている評者の視点からすると、より普遍的な概念を用いて、民俗誌作成における権威の問題や「現地の知識人」の問題という形で議論を整理してみたい欲求に駆られる。たとえば、川森博司「記憶から声へ—共同作業としての民俗誌の可能性—」(『現代民俗誌の地平3　記憶』岩本通弥編、朝倉書店、二〇〇三年)は、石井の『遠野物語の誕生』の研究成果に学んで、そのような議論を展開したものである。また、「現地の知識人」という問題に関しては、桑山敬己「「現地」の人類学者—内外の日本研究を中心に—」(『民族学研究』六一巻四号、一九九七年)も関連した議論を展開している。

そして一方、目の前で展開されている観光の場の語りに身を浸してみることから何かが見えてこないかと「安易なフィールドワーク」(石井『遠野の民話と語り部』、二六二頁)への欲求に駆られたりもする。石井は、そこで一歩踏みとどまって状況を見る必要があることを教えてくれる。しかし一方で、野村純一が『口承文藝研究』第二六号(二〇〇三年)の書評(一四五頁)で指摘しているように、『遠野物語』の文献的研究を差し置いて、現在の遠野でさまざまな再生産がおこなわれているという事態があり、石井の研究の射程がそこにまで及ぶものなのか、今後の展開を見守っていきたいところである。

『遠野物語辞典』も、石井の「言葉へのこだわり」という視点を鮮明に反映している。石井は編集に際して二つの原則を立てている。「民俗学が後に作り出した概念を持ち込まない」ことと「周辺に見られる類似の現象に飛びつかない」ことである(一四頁)。「あくまでも『遠野物語』に限定し、そこから言えることだけを述べる、という態度を貫こう」(一四頁)とすることから、この辞典が立ち上げられている。動物編、植物編、神仏編、怪異編、衣服編、食事編、住居編、行事編、道具編、言語編、身体編の一一編に分けたうえで、項目の語彙を立て、「それぞれの言葉について、物語の用例をすべて盛り込み、その言葉が物語の中でどのように用いられているのか」(三二一頁)が説明されている。その効用はどのようなところにあるのだろうか。石井は「『遠野物語』に出てくる言葉に限定して項目を立て、それによって分節された物語をつなぐ糸にしてみたかった」(一四頁)と述べている。たとえば、「馬」は『遠野物語　増補版』の「題目」にはなく、「索引」でも網羅されてはいない。これを網羅して、新しい『遠野物語』の読みの可能性を拓きたいというのが石井の意図である。

野村純一・菊池照雄・渋谷勲・米屋陽一編『遠野物語小事典』(ぎょうせい、一九九二年)は、「事典」という言葉が示すように、『遠野物語』の背後にある事象・状況の説明に多くを費やし、遠野盆地で生活してきた人々の歴史を蘇らせてくれる。それに対して、石井監修の『辞

典』は、テクストの中にある言葉にこだわったものであるが、難を言えば、地元の視点からの語彙の読み解きがなされていないことが挙げられる。

平成一三年度～一四年度科学研究費補助金研究成果報告書である『昔話の伝承と資料に関する総合的研究』は、「第一部　対談と座談会」「第二部　遠野昔話の世界」「第三部　語り部と語る」「第四部　序文・書評その他」「第五部　資料目録」という構成になっている。この中で、特に第一部と第三部に収録された、遠野の語り部自身が現代における昔話の語りをどのようにとらえているのかを示す座談およびインタビュー資料が、今後の口承文芸研究にとって重要な資料になるものと考えられる。

「語り部教室といろり火の会－遠野昔話の継承をめぐって」と題する座談資料では、地元で開催されている「語り部教室」の参加者で、現在「いろり火の会」という語りのボランティア活動をおこなっている語り部たち三人が、それぞれの思いを語っている。たとえば、バスガイドをしていた工藤さのみは、語り部教室に参加して「断片的に、点で覚えていたものが一つの線に、一回ごとになっていくんですよ。たまさか同じ昔話でも、題名も一緒、本質も一緒だけれど、うちの母は、ここはこういう風に語ったなとか、伯父はこうだったなとか、違いが出てくるんですよね、これがまた面白いんです」（一八頁）と述べている。また、小松敦子は「テープが切れるくれえ」先輩の語り部の話の録音を聞いて勉強したことを述べる（二三頁）とともに、「何よりも、九五歳の母親を介護していますから、家の中にいると滅入ってしまうこともあるんですけんとも。ストレス、私の鬱憤をはらすために（笑い）、そのときは思いっきり人を笑わせるような話をしたりしてね。そして私の鬱憤はらしにして、ストレス解消にしてると、みんなに言って笑わせているのですけんとも、お客さんが喜んでくれたときの感想文見たときなどは、これで良かったのかな、まだ、なんて考えてみて、あそこがほんとにわたしの生きる力です」（二七頁）と駅前の待合室で語る経験を述べている。また、語り部たちのまとめ役の佐藤誠輔が「いろり火の会で語っていることで、すごいなと思うことは、聞き手におもねる話をしないということです」（三一頁）と述べているのは、語りの位置づけとして重要な発言である。

第三部の「語り部と語る」は地元で活動している遠野常民大学の会報『遠野常民』に掲載されたものを許可を得て再録しているが、石井がこのように地元の人々と密接に連携を取りながら研究を進めている点は、二一世紀の研究モデルとして評価されるべきものであると評者は考える。

この科研報告書の冒頭に、石井は「国文学へのパラダイム転換」ということを掲げ、「二一世紀に向けて、昔話研究の基盤は、民俗学の中に置くよりも、国文学の領域において、その伝承と資料を位置づけてゆく必要があると考えられる。国文学の一分野に入れることにより、古典文学や近代文学との連動が追究しやすくなるばかりでなく、幼児教育や学校教育の中でも扱いやすくなるなど、その価値に対する認識は大きく変わるだろうと思われる」と述べている（五頁）。たとえば、佐々木徳夫は『昭和四八年冬休み民話集』について「間接採集」であるゆえに資料として劣るという立場を取ったが、石井は「子供たちが集めた作文も、非常に貴重な資料である」という立場を取ることにより、昔話資料の幅を広げている。民俗学から国文学へのパラダイム転換は、このような点に現れているが、石